

大工道具について

切る、削る、掘る刃物についての簡単な説明

1. 切る道具-鋸 (のこぎり) について

大工の鋸 (のこぎり) は木をきる目的の道具です。

主に両刃鋸、片刃鋸に分かれ、目的に応じて専用の鋸も存在します。

今回は専門的な鋸の解説は控え、両刃鋸について少し解説します。

両刃鋸は明治中期頃から作られたようで、それまでは片刃鋸でした。

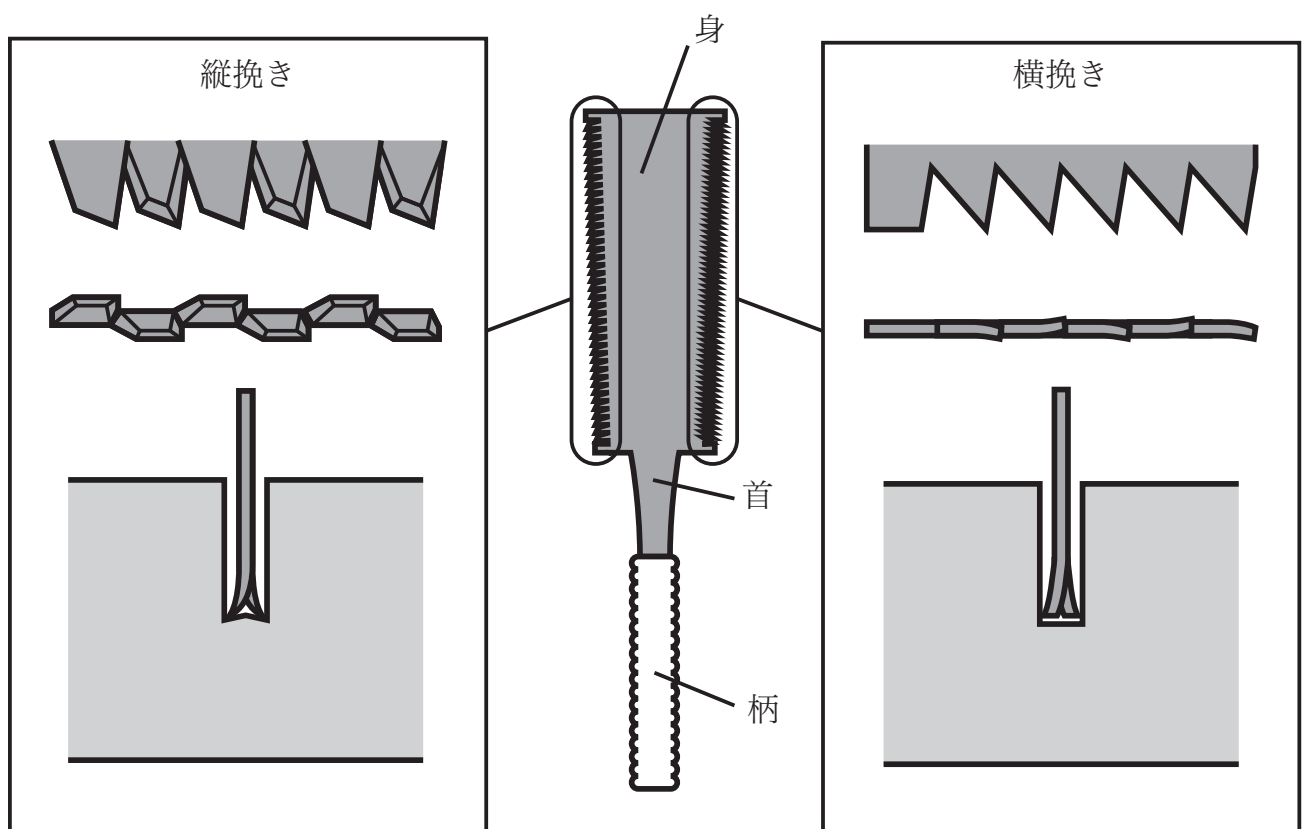
両刃鋸は長さにより目 (刃) が変わるため、長さで名称がついており (8 寸鋸や 9 寸鋸)、刃渡りが長くなる程、目 (一つの刃) が大きく荒くなります。

両刃鋸は片方に繊維を切断する横挽と繊維方向に裂 (さ) く縦挽が付いています。

刃先は横挽も縦挽も左右に振られます。これを「あせり」と言い、鋸の身より切削面を広く取り、抵抗を少なくします。

横挽は刃先が鋭く尖っており、繊維を切断し木材を切り進めます。対して、縦挽は刃先が鑿 (のみ) の様になっており、繊維を削ぎながら木材を切り進めていきます。

以上のことから両刃鋸は木材の性質と特性を理解し、刃先を変えた合理的な大工道具だと考えられます。



2. 削る道具-鉋(かんな)について

鉋(かんな)は、木材の形成と表面の仕上げるに使う道具です。

鉋は槍鉋(やりがんな)と台の付いた鉋の分けられ、台の付いた鉋は目的に応じ、さらに複数に分けられます。

目的により形を変え、溝をつく形、特殊な形を形成するものなど数え切れないほど多くの種類が存在します。

今回は、主に知られている平鉋(ひらがんな)について簡単に説明します。

平鉋は、主に木材の形を形成することや表面を滑らかに仕上げることに使われる大工道具です。

今の形の裏刃付きの鉋は、鋸同様、明治中期に素人向けに考案されたと言われています。

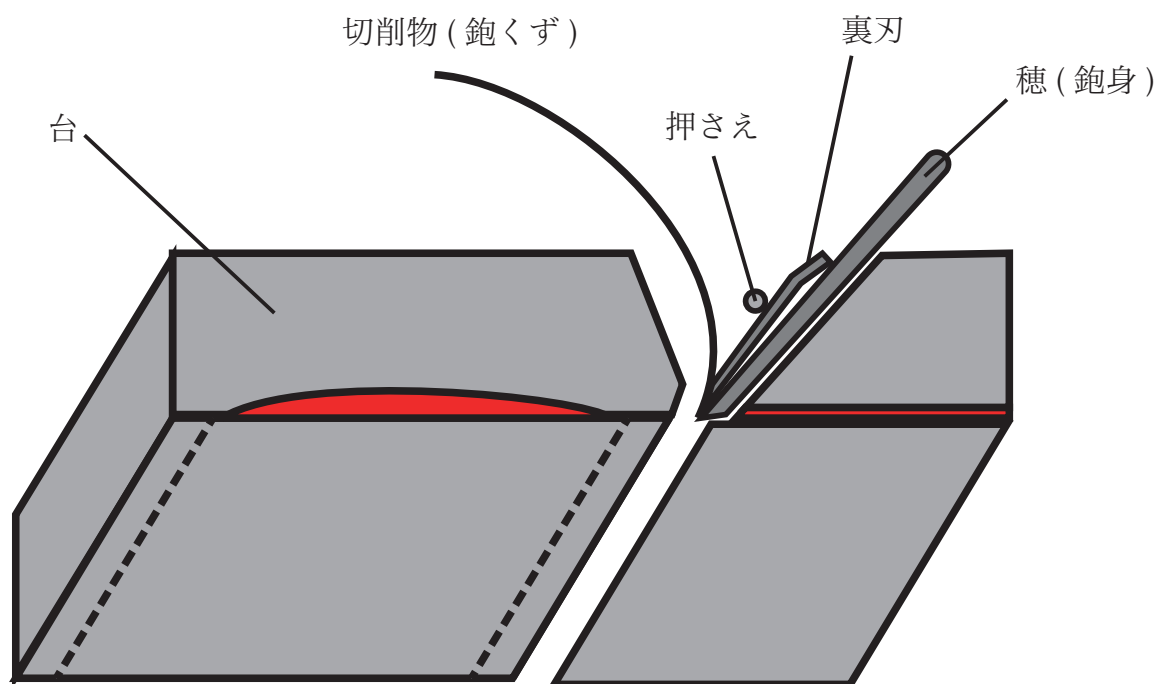
裏刃は木材の目に逆らって削る際、逆目を防ぐために付けられた刃です(薄く裂く作用により削るため、逆目(削げ)が出やすい為)。

このように工夫された道具ではありますが、大工道具の中でも一番使いこなすのに苦労する道具であり、見習いの頃から扱い、年数をかけて熟練の技を身に着けます。

削る木材の種類により、鋼、研ぎの角度、台に仕込む角度なども変えて作業にあたり、その他の調整も行う複雑な大工道具です。

今はインターネットや書籍により様々な解説がされていますが、全ての事が解説されているわけではありません。

目的に合わせた調整ができないと使いこなせない大工道具なのです。



3. 掘る道具-鑿(のみ)について

大工道具の鑿(のみ)は、木の繊維を切ったり裂いたりして、穴や欠き形の形成、仕上げなどに用いる道具です。

鑿の種類は無数とも言われ、鉋同様、目的により形と大きさを変えます。

鑿のものは石器時代に遡ると言われています(石器を鑿として使割れていました)。

法隆寺建立の頃には複数の種類が作られていた事が切削痕(せつさくこん)から確認されています。

昭和の高度成長期に電気ドリルが普及するまでは穴屋大工と呼ばれる職人がおり、仕事量の多い東京では様々な流派の穴屋職人が居たそうです。

鑿も丈夫で切れ味が良く、効きの良い(打撃を刃先に効率よく伝える)鑿を作る職人が東京に多く居り、穴を掘る専用の玄翁(げんのう)、通称「穴屋玄翁」まで考え出されました。

今回は特殊な形の鑿ではなく、平鑿の中の叩き鑿と迫入(おい入れ)鑿を少し解説します。

叩き鑿と迫入鑿の大きな違いはその大きさです。

同じ幅の鑿を比べると叩き鑿は大きく、迫入鑿は小ぶりです。

先に書いた穴屋大工が使っていたのは叩き鑿で、構造材(柱、土台、梁など)の加工に用いられます。一方、迫入鑿は造作作業(建舞(たてまい)後)に用いられます。

鑿も鉋も基本は片刃であり、鎗面(しのぎめん)はもちろん重要ですが、裏の研ぎは同等に重要で裏が良く手入れできないと精度の高い加工は困難です。

刃の穂の部分ばかりではなく、柄の仕込み調整も作業の精度、速さに影響を及ぼすところで、必要に応じ交換や手入れをしていきます。

一概に叩いて切るだけの道具と考えがちですが、実は精度、効率共に良い作業をするにはそれなりに良い品を用意しなければならない大工道具です。

